

井上円了の日本人論(1)

伝記資料に関する試論

高木宏夫

takagi hitoo

1 伝記の問題点

井上円了研究を始めたころ、「井上円了研究会第三部会」において研究方法が問題になったことがあった。哲学と社会科学の両分野を主とした研究者が一つのプロジェクトチームを組んで研究しようとするのであるから、必然性をもった問題とも言えようが、その一つは「井上円了の生きていた時代を十分に理解する努力をして、それから井上円了を解釈しよう」と言うことで、とりあえず共通点を見いだす努力の結果であった。これは、すでに故人となられた飯島宗享教授の発言であった。「井上円了はフランスの百科辞典派の誰れに当たるのか」「啓蒙家というがヨーロッパのそれにあたるだけの近代の資質が井上円了にあつたのか」「井上円了の発展には否定媒介がないから西洋哲学を十分に学んだとは言えない」と言つた議論が、井上円了研究会第三部会が始まつた当初の哲学の専門家の発言だつたから、問題意識の相違よりも研究方法に手のつけようがないほどの違いがあつた。それも三年ほど経つと、「社会科学流が始まつた」とか、「とてもその思弁にはついていけない」とか、冗談を言い合えるようになった。

こういつた形をとつて多岐にわたる学際の溝を埋めざるを得なかつた所に、思想に関する研究の戦後的な問題

が提起されていたと考えなければならない。この問題の背景には、大塚久雄氏に代表される「近代主義」とよばれたヨーロッパの資本主義発展の法則（その理論的根拠はマックス・ウェーバー）を無条件に日本に適用する立場と、弁証法的唯物論による日本資本主義分析を前提とするマルクス主義に近い政治的な立場との二つが、思想分析の主流であったということが大きく影響していると考えるべきであろう^{（注）}。

いいかえれば、観念論と唯物論の二つの両極の分析の方法論、いわゆる「ウェーバーとマルクス」という言い古された古典的な問題がここにも色濃く反映しているということである。これまでの伝記の研究の多くは文学的で、むしろそのほうが資料の不足を致命傷としないで処理出来る強みがあるばかりではなく、「作者の読みの深さ」と言う形の「眼光紙背に徹する」人間像を描くことができた。しかし、井上円了記念学術センターが取り組む場合は、もう一つの実証資料に基づく緻密な分析が要求される。そこで、タルコット・パーソンズの価値体系の理論やパーソナリティ形成の理論に対応出来るばかりではなく、マルクス主義者の上部構造と下部機構の理論にも対応出来る資料を集め、誤りを修正する必要がある。井上円了の伝記に関するデータベース作りは、その意味においては、未着手の困難な仕事である。そこで、二回に分けて問題提起を試みた、その第一稿が本論である。

2 雑誌『日本人』における見解

井上円了は『真理金針』や『仏教活論序論』の著述によって、明治二〇年前後に宗教界や思想界では著名人になつていたが^{（注）}、明治二一年四月に刊行された志賀重昂を中心とする雑誌『日本人』に積極的に参加したことによつて、宗教界のみならずさらに広い思想界ならびに新たに形成されつつあった知識人層にも知られ、影響を与えていった。それは次のような雑誌『日本人』に対する当時の論評に表れている。

『令知会雑誌』は三月二二日号では

日本人と云へる標題の雑誌を井上・辰巳・三宅・棚橋其他諸文士が協同にて近日発行せらるる由、此雑誌は日本人固有の徳義を發揚せしむるを主眼とし、宗教政治に亘て兩ら改良進歩を謀るの目的に出たる由なるが、右は有名なる学士輩の協同編集せらるゝ処なれば其体裁等も凡て完全なるべければ、虚声や糟粕主義の新聞雑誌とは事かわり、定て高論卓説の社会の耳目となるべきものならん。(注3)

と刊行に先立つた予告の論評を掲載している。

仏教界では僧侶に、時代への対応のため時事に志ある者は読むようにと薦めていて、『明教新誌』明治二二年四月六日号で

井上に至ては読者の熟知する所故に更に評するを用いず、この雑誌の主義たるや、其宗教の点に於いては亦一箇余輩の後勁たるを得る者なれば、時事に志ある仏教家諸氏に於て必読すべき者なりとすと述べている。

この雑誌『日本人』の創刊号の巻頭には

予輩同志ハ「日本人」ノ隆替ト進退去就ヲ俱ニシ、終始全力ヲ極尽シテ、之ニ関繫スル万般ノ事業ヲ斡旋シ、兼テ平生懷抱スル処ノ精神ヲ、姓名ト共ニ定時刊行雑誌ニ告白センコトヲ誓約スル者也。

とあり、一一名の連署「文学選科卒業 加賀秀一、農学士 今外三郎、島地黙雷、東京英語学校 松下文吉、文学士 辰巳小次郎、文学士 三宅雄二郎、農学士 菊地熊太郎、文学士 杉江輔人、文学士 井上円了、文学士 棚橋一郎、農学士 志賀重昂」の九番目に井上円了は名を連ねている。そして、その掲載論文「日本宗教論緒言」に於いて次のように述べている。

嗚呼今日ハ神武天皇ノ祭日ニ非ズヤ。嗚呼今時ハ鶯花清明ノ好時ニ非ズヤ。嗚呼今代は明治昇平ノ盛代ニ非ズヤ。此盛代ニ際シ、此好時ニ当タリ、此ノ祭日ニ臨テ「日本人」発行ノ美挙ヲ見ル。我輩日本人タル者豈ニ一言祝スルコトナキヲ得ンヤ。況ヤ小生ノ如キ此創業ノ一人ニ加ワル者ヲヤ。

予両三年以来不幸ニシテ病魔ニ罹リ、一旦読書著作ヲ廃シテヨリ爾來親ク筆林硯池ノ間ニ逍遙シタルコトナシ。而テ今「日本人」発行アルヲ聞キ、積年ノ病勢モ一朝ニシテ快途ニ就クノ思アリ。

と近況を説明した上でその抱負を語っている。

井上円了はこの雑誌で直接に「日本人」について論じたのではないが、

抑モ日本人ノ日本人タル所以ノモノ之ヲ分析スルニ種々ノ元素ヨリ成ルヲ見ル。而シテ宗教其一二居ル。畜ニ其一二居ルノミナラス、其諸成分中ノ主元素ナルヤ疑ヲ容レズ。且ツ其所謂宗教ニハ古來儒仏神ノ三教アリテ、互ニ相待チ相和シテ、日本人ノ日本人タル一大複合体ヲ形成セルニ至ルヤ亦必セリ。然リ而シテ多数ノ人民ヲ薰染シ思想ヲ占領シ、其影響最モ重且大ナルモノハ独リ仏教ナリトス。

と言っているように、「日本人論」を展開するために、その基盤を構成する宗教を問題としたものであるから、雑誌『日本人』第一号から第二号までの六カ月間に六回に分けて書いた「日本宗教論」は、井上円了流の「日本人論」と見ることができよう(注4)。

この日本人論の問題意識について、井上円了は

余が日本宗教論は全く国家の独立、即ち本誌編集人志賀君の所謂「国粹保存旨義」に本きたる者にして、決して余が従来の宗教を偏愛するの私心に出たるに非ず……今此宗教論は総じて儒仏神三道を指すと雖も、別しては仏教一道を指すなり

と言い(注)、「国家の独立」を主眼点とした問題意識の上になつてゐることを明らかにし、「之を論明するには先づ近今両三年日本の輿論の進路方向及び其利害得失を討究するを要す」と述べて、さらに「「一國中の政党論民権論の如きは其事大ならざるに非ずと雖も、之を一國の独立論に比すれば小なる者と云わざる可らず」。なぜかと言えば、「一國中の所謂民権論者は官権党を排し、官権論者は民権党を斥し、互いに睨視し互に敵視し、甚だしきに至りては腕力相争ひ干戈相闘ぐに至ることあるも、是れ唯一家中の兄弟間の争闘のみ、一朝外寇の事あるに当たっては其所謂民権党も官権党も皆共同相和して全力を防禦の一事に尽くさざるを得ず」と云うのである(注)。

このような極端なまでに「国家の独立」に固執した政治的・社会的背景については後述するが、三百年の封建社会の鎖国からいきなり不平等条約を強制されて開国はしたものの、漸く内乱が終わつたという政治権力も弱かつた時代の議論である。その時代状況を、『真理金針』や『仏教活論序論』に記述した仏教と僧侶の革新をここで再度述べたうえで、次のように展開している。

抑近年の輿論は日本従来の風を去りて一步進む毎に益々西洋の方向を取り、衣服飲食住居を始めとし容貌裝飾交際礼式歌舞音楽遊戯に至るまで盡く西洋を模倣し、甚きに至りては雑婚論を唱へて日本人の体格血色まで西洋に変せんとし、言語文章も或は洋語欧文を用ひ、宗教道德もすへて耶蘇主義を取らんとするものあり、縦ひ陽に其主義を唱へさるも、其内心に入りて之を覩れば我邦の学者才子にして苟も上流の地位を占むるものは殆んど此主義を取らざる者なきか如し、(注)

このような一見荒唐無稽のように思える欧化主義は単なる過渡期の一事象とは言つても、「学者才子にして苟も上流の地位を占むるもの」の殆どはこの主義者だといふほどであるから、政教社に集まつた当時の進歩的文化人が一種の危機意識をもつたのも当然といえよう。とくにその具体的な現象を次のように述べている。

近年西洋風の都鄙の間に流行するや実に狂するか如きものあり、都下の紳士は充分愛國の思想ありて西洋風を用ふるを以て西洋主義の爲めに愛國を忘るるの恐れなしと雖も、中等以下に至りては、愛國も獨立も更に弁せずして猥りに西洋服を着、西洋食を用ひ、西洋煙草、西洋酒、西洋結髪、西洋器品、其他百事皆西洋にあらされは一箇の人物となること能はざる様に考ふるものあり、余屢地方を巡行して其実情を目撃し又人より屢聞く所なり、或は地方には其一身の分限を計らず猥り西洋風に流れて爲めに資産を破りしものありと云ふ、其事の真否は知らずと雖とも、上の好む所は下之れに従ふは自然の勢にして西洋風一たび上流社会に行はるるに至らば、無学無識にして其心愛國の何たるを知らざる下流社会に至る迄、皆西洋風を尊重し西洋品を偶像視するに至るべし、(注8)

とくに井上円了が危機意識を高めたのは、日本文化の根底に関わる言語と宗教を中心に欧化主義が「上からの」変革を進めたからである。

衣食住の如きは時勢に應じて之を変更するも目前に重大の影響を見ずと雖も、言語宗教に至りては決して輕易に変更すること能はず、何者一国の大事の直接に関するものをや、一国の大事とは何ぞや、曰く獨立是れなり、言語は思想の表象なり、宗教は人心の膠漆なり、思想を表示するのは言語なり、人心を結合するものは宗教なり、宗教変すれば人心一たひ散し、言語変すれば思想一たひ移らざるを得ず、故に余將に言はんとす

言語宗教を變するは人の精神思想を變する者にして、我邦の言語宗教を變するは我日本人の日本人たる精神思想を變するものなり(注9)

さらに、井上円了はヨーロッパの強國は「自國の言語宗教を用いしむる」方法によつて、武力を用いないで征服してきたとみているから、思想を重視したのである。

思想の形成はどのように行われるのか、この問題に対して

古来学者中に天賦論者ありて思想は人の生来有する所の本性の発達したるものなりと云ふと雖も之に対して経験論者ありて思想はすへて外界の経験より、生すと云ふ、此二者は或は各一方に偏するの恐れなきにあらざると雖も、思想の原形原力は人の生来有する所のものにして、其思想の材料となるものは外界の経験より来ること疑を容れず、即ち外界の経験より得る所の種々万般の影像か人心の鏡面に積集して其所謂思想を形成するなり、(注10)

と見解を述べて、思想の担い手については一部のエリートや指導者に求めることなく、「多数」と表現する大衆に期待している。

日本の独立は二人の独り能くすへきものにあらずして、社会多数の人の独立を要するなり、例へば社会多数の人皆独立の精神を有するときは其国独立することを得、多数の人尽く独立の精神を失ふときは其国亦独立を失はざるを得ず、今余か我が邦の独立に関し深く憂慮する所は此点にあり、(注11)

以上の見解に対する反論を予想した井上円了は、愛国心の必要性を積極的に打ち出したことよって、「大和魂」だけを主張する論者の現れることを考え、次のように述べている。

往々一二の憂国者ありて日本人の愛国の精神日に月に減滅するを見て慨嘆して曰く、之を医するの法は大和魂を發揮するに若かすと、其説道理なきにしもあらずと雖とも、是唯々愛国心を減滅したる結果を見て其原因を知らざる論のみ、故に何程口舌に其事を喋々するも、亦徒勞に属せざるを得ず、蓋し世の有学有識者の常に其心算を誤るは、天下の人民をして尽道理を解し是非を弁ずるものと一時に信するに由る、而して世間能く是非分別の力を有するものは千万人中一二人の比例に過ぎず、故に此の如き無智無識の人民を誘導するは到底理

論の力の及はざる所にして、他の方法を用ひざるを得ず^(注1)

それだけでは対症療法の応急策にすぎず、根本的な思想対策が必要なのだと言き、大衆は「道理を解し是非を弁ずる」と信じるのは間違いで、「無智無識」の人民には「他の方法を用ひざるを得ず」と結論づけている。先に「多数」と表現した大衆信頼とこの見解とは一見矛盾しているように見えるのであるが、井上円了は無知の大衆を教化することを一生の仕事としていたように、具体的には「修身教会運動」を起こして全国を歩き、直接大衆に講演をして呼びかけたように、愚民からの脱却に手を貸すことを天職としていた。むしろ、指導者に問題があるとして次のように述べている。

近時我社会の上流に立ち人民の先導者となり輿論の方針者となる者は什中八九は皆純然たる洋学者にして、其人西洋の文書に精く西洋の事情に明かなるも日本従来の文学事情に明かなる者甚た希れなり、或は日本の歴史に通せず、日本の文書を解せざる者亦全くなきにあらず、此の如き諸士は固より西洋学西洋風の便利の熟知するも、日本従来の文物中真に価値を有するものあるを知るべき理なし、羅馬字文の有益を説くもの大抵和文漢文に暗き者なり、仏教の無用を唱ふる者は大抵仏書を一読せざる者なり、是等の人の説を以て与論の方向を立てるときは西洋風の一方に偏する弊あるを免れず、……

我社会にありて学者と称せらるるものは大抵皆西洋に留学して、数年の歳月を其社会に送りしを以て、多少其風俗に薫染せしは疑を容れず、之に従つて其思想も亦西洋の思想に風化せられたる者亦全くなきにあらざるべし、^(注13)

以上が井上円了の「日本宗教論」における問題意識の骨子である。ここに一貫している考え方の中で徹底しているのは、国家の独立への強い願望と日本人としての主体性の保持と発展である。この当時流行語となった『仏

教活論序論」の「護国愛理」(注)にもこの願望が強く表れているが、雑誌「日本人」では「愛国」という積極的なより強い表現が使われている。井上円了がこの雑誌に書いた文章は、現在われわれが考えるよりはるかに専門を越えた文化評論的なものも少なくない。この時代らしい啓蒙的側面をもたざるを得ない知識人の使命の一面が、ここに現れているものと考えられよう。

それは、「日本人」に「坐ながら国を富ますの秘法」と題し、「在英国 井上円了寄稿」の形で、明治二二年一月から二二年一月の間に四回に分けて連載された。「我が日本国をして万国に競争し万国に対峙せしむるの方法は種々あるべきも要するに国を富ませるより先なるはなし、此一事は誰も喋々する所にして別して欧米各国を巡視せし者は一人として富国の急務を説かざるはなし」と冒頭に述べて、しかしその方法ということになると、「人々の説各異にして」いるが、要約すると「兵備を拡張する」「製造殖産の事業を盛んにして製産物を増加する」「商業運漕の便を開き通商貿易を盛んにする」「日本中の貧民を外国に出だし、其地において労力を取り金を得さしむる」の四つになるが、それを「左の如く名くるなり 第一、強兵説 第二、製産説 第三、通商説 第四、出稼説」と言い、第一は金がかかり過ぎる、第二は日本在来のもものと違つたものが必要だからこれも金がかかり過ぎる、第三は長い時間のかかる実行しがたいこと、第四は中国の例を見ても良策とは言えないと結論して、次のような案を提唱している。外国資本による大ホテルをつくり、外国人の観光客を誘致し、日本の美しい風景を商品とする観光政策から始まってリゾート地政策まで発展させ、逐次日本の経営に移管させてゆく、と言うのである。この可能性をいろいろな面から論じ、無理強行をせずに徐々にこの四つの説を實現すべきだと説いている。おそらくこの当時にはあまり顧みられない空想的なプランの扱いを受けたのではないかと思われるが、数字をあげて力説している。

こうした専門を外れてみえる発言は、観念遊戯を避けて「実際」を重視した井上円了らしい思想家としての一面とも思われるが、井上円了がこの時代に強く表現した「護國愛理」「愛國」が生み出したものとも見られる。ではそれが何であったのか、この問題に移りたい。

3 パーツナリテイの形成

井上円了は現在の新潟県三島郡越路町字浦の真宗大谷派慈光寺の長男として生まれた。真宗は教祖親鸞以来「非僧非俗」の在家仏教の立場を守って、寺の住職は結婚をして世襲するのが当然で、長男は「候補衆徒」と言う身分を本山に届けることになっていて、幼時から僧侶・住職としての教育を受け、一種の天職としての役割期待を、家庭からも社会からも受けて育っている。とくに安政五年（一八五八年）生まれで徳川封建制が滅んで明治新政府ができる過程に、少年時代を過ごした生家所在の村では、大きい事件を経験している。この村は幕末に長岡藩に移籍されて、それから一挙に年貢が上がったという。そこで農民一揆が起こり、義民佐倉宗五郎になぞらえられている岡村権左衛門が獄門に首をさらされた事件が起こり、そのため越路町の農民は年貢減免の措置を受けたという。この事件はその後も尾を引いている。慶応四年円了一〇歳のとき、佐幕派であった長岡藩を新政府軍が「北越戊辰戦争」で攻撃したとき、村の人々は新政府軍側について戦ったというのである^(注15)。義民の話は現在も伝わっていて、大きな石の記念碑はお盆のころ子供達が集まって掃除をし、当時を偲んで義民談が語り伝えられている。井上円了の父は特にこの権左衛門の墓と記念碑とを大切にしたいというから、井上円了にとって「国破れて山河あり」の実感は強いものがあつたと思われ、特に政治のもつ生活への影響力の強さは身に染みていたものと思われる。

井上円了に關する美談の一つに、大雪の日に下駄の鼻緒が切れたが漢字塾に裸足でたどり着いたと言う話がある。ところが、「長岡近辺は有名な豪雪地で大雪と言えば四メートルは降るから、大雪の日に下駄をはいて出かけることはできない。」と井上円了の生家の現住職から言われたことがきっかけで調査をしたところ、面白いことが分かった。生家に伝わっている話だと、雪の日に漢字塾にたどり着いたのが一人だけだったと言う話と、井上円了が漢字塾に出かけて鼻緒が切れたので途中から家に帰って来て母親にひどく叱られた話とは別で、叱られたのは次のような理由によるとのことであった。母親は「道のどの辺りで鼻緒が切れたのか」を聞いたところ、真ん中よりも塾に近い所まで行っていながら戻ったので、その非合理的な行動を叱ったという^(注16)。

このような少ないエピソードから一人の人物像を描くことは危険であるが、あえて問題提起の意味を込めてふれてみたい。世良民平は「井上円了の人間像」と題する論文において、「伝記・辞典類・追悼文などからの結論」「仏教哲学（哲学）の研究者」というA側面と『教育・啓蒙家』というB側面が密接不可分に相互関連して、明治の異色啓蒙主義者が形成されている」という見解を出している。しかし、個別の資料では井上円了に対する評価が両極端に分かれていて、マイナス評価の方が多いとも述べている^(注17)。この見解に用いられた資料は、井上円了の死後書かれたものと言ってよいだろうが、その意味では井上円了の人生をトータル的に評価して描いた人間像とも言えよう。したがって、明治二一年前後の井上円了に限定して分析するには参考資料にすぎない。とくにここに取り上げている井上円了は三〇歳前後の新進気鋭の有名な人物である。『真理金針』や『仏教活論序論』のキリスト教批判は、当時の最も先端的な進歩的理論「進化論」を武器としたものだっただけに、井上円了は極めて新鮮な理論家として注目されただけでなく、実務家養成の私立学校創設流行の時代に東洋大学の前身哲学館を「哲学教授のため」に創設したから、思想界・宗教界から注目を集めたのは当然といえよう。この進化論については、

東京大学の「外国人お雇い教師」フェノロサの影響と思われるが^(注18)、雑誌「日本人」の「国粹主義」にもその影響が反映しているものと思われる。

日本従来の名産佳品にして其値を失ふたるもの幾多あるを知らず、実に国家の爲めに愛措すべきことならずや、近頃其失ふたる名産佳品中其真に価値あることを発見したるものは日本の美術なり、是れ日本人の発見に出でたるにあらざして西洋人によりて発見せられたるものなり、若し西洋人あるにあらざれば我人は皆西洋の美術を称賛して日本の美術を失ふに至るべし、^(注19)

と述べ、その原因を

更に顧みて近時西洋風の流行したる原因を考ふるに第一に西洋諸国の強盛にして文化の我より先に開けたるに由り、第二に日本の学者才子の西洋の事情に明らかにして日本の事情に暗きによる、^(注20)

と云つて、日本の後進性を素直に認識している。この点は「日本人」の発起人が当時の西洋通の知識人であり、その中でも当時はまだ非常に少なかった農学、文学の「学士号」をもつた日本のエリートだったことを充分考えたい。井上円了は明治二二年六月から一年間欧米を旅行し、生活経験を通して西洋と日本を比較することができるようになつていた。そして、帰国の翌月の七月に「哲学館将来ノ目的ニツイテノ意見」を発表して、その目的が「日本國ノ独立、日本人ノ独立、日本学ノ独立」にあるとし、「宇宙主義に立つ日本主義」という位置付けをした^(注21)。

井上円了の「日本人の主体性の確立」の主張は、幼少年期における家庭ならびに社会環境に影響を受けたものが考えられるが、青年期の日本の目まぐるしく変わる政治経済の状況にも影響されたことは当然であろう。例えば、井上円了の最初の旅行記である『漫遊記』^(注22)によれば、明治一〇年に井上円了が越路町から京都へ行ったと

き（一九歳）、柏崎から舟にのつて今町を経て、長野から中仙道を通つて琵琶湖を渡り、京都に到着している。翌一一年東京には、京都から神戸まで「鉄車」に乗り、神奈川（横浜）まで汽船、新橋まで鉄道と、文明開化が進んで来たことを経験している。封建社会の国と外国の強制的開国を経た日本国との違いは決定的なものであることを、当時の人々は経験的に感じる事ができた。とくに日本人という意識との関係を見ると、井上円了の個人的な生い立ちや使命感を持つことを求められる住職を継ぐ立場など、パーソナリティ形成の過程に、思想を發展させる条件が備わっていたものと言えよう。

4 社会経済史的条件

日本の独立を強く意識したのは、この時代の青年の特徴であつたと言つてよいのではなからうか。というのは、不平等条約によつて膨大な金・銀が海外に流出し、それを解決しようとすれば「内地雑居問題」に当面するとうように、知識人ならだれもが強く危惧する日本の植民地化の恐れが、日本の構造的な「鎖国」による遅れに起因していたからである。

a 内地雑居問題と条約改正問題

内地雑居問題と条約改正問題とは表裏の關係にあるが、国家の独立に関する危機意識が常につきまとつていた。その状況をこの節では当時の新聞記事を中心に見てゆきたい（注23）。

日本政府が関税ノ全権ヲ占有センコトヲ要求スルコトアラバ、外人ハ亦タ其代償トシテ内地雑居等ノ允許ヲ求ムルハ明白ナリ。此ノ時ニ当リ万ニ一ニモ政府ガ之ヲ聴許シ、雑居旅行等ノ制限ヲ以テ海関賦税一権ヲ買収スルコトアラバ、此ノ日ハ是レ日本帝国ガ至貧至弱ノ長途ニ彷徨スルノ初日タリト云フベシ。日本帝国盛衰

ノ命運ハ此ノ日ニ於テ定レリト云フベシ。〔明治一〇年一月二四日 郵便報知新聞（以下では年月日、新聞の字を略す）〕

と当時の新聞は「日本の一大事 外人雑居問題」と見出し（以下では「」で示す）をつけて、記事を書いている。このような問題意識も、明治一九年頃になると、

〔内地雑居準備 三府五港の地価調査〕〔一九・三・三一 朝野〕

〔内地雑居までに体格改良 其為めに肉食奨励の供養社設立〕〔二〇・一四 時事〕

〔さて頭痛 内地雑居後の公用語 日本語だけでは間に合ふまいが 英・仏・独・露それぞれの注文〕〔二〇・一・一四 高知日報〕

〔まる一年二十七回の会議を重ねて条例改正会議全部を議了す 内地雑居の許可だけは確定的〕〔五・二一 改進〕

このあたりから色々の論争が始まった様子が当時の新聞の見出しを見ても分かるほどに展開された。

〔井上哲次郎の内地雑居論〕〔二四・四・二 朝野〕

〔大日本協会設立 内地雑居高早論の諸団体を結合〕〔二六・九・一六 東京日日〕

〔新風連の残党熊本に起つ 今度は政治的に、併し乍ら……無謀の内地開放は断乎排撃〕〔九・二三 朝野〕

〔非雑居党出現に板垣伯の鬪志燃湯〕〔一〇・一三 東京日日〕

この問題は次の条約改正問題と表裏の関係にあるために、この後も二〇年近く問題を引きずって行くが、その始まりは非常に早く、明治二年二月三日の太政官日誌によれば「外国官」に「各国条約改定取調、御委任之旨後沙汰候事」とあって、一年には大きな政治問題となっていた。

「条約改正の秘密交渉を外字新聞が素破抜く」〔二一・七・二五 朝野〕

「秘しかくしに隠されつつある屈辱的条約改正問題」〔八・七 東京日日〕

「条約改正の草案 各国公使へ通知」〔一三・七・一五 東京日日〕

「条約改正掛 新設」〔八・一三 東京日日〕

「帝国の主権を侵害せんとする屈辱的改正条約締結されん 裁判に優勢の外人を立会はしめんとす」〔二七・

二・二二 郵便報知

「税権恢復、治外法権撤廃等々 我が国権を世界に伸張すべき条約改正の幕 今日ぞ切つて落とさる」〔一九・

五・一 東京日日

「まる一年二十七回の会議を重ねて 条約改正会議全部を議了す 内地雑居の許可だけは確定的」〔二〇・五・

二一 改進

というように、中間的な一応の区切りを示している。そこで問題を元にもどすと、雑誌『日本人』が取り上げたことに關し、次のように田口卯吉の演説を報道している。

昨日午後二時より浅草須賀町なる鷗遊館に於いて開かれたる田口氏の一人演説は同時刻迄に早や門前入山を築き、場内は立錐の余地なき迄にて、少し遅れたるは已むなく帰途に就きし位の盛況にて、一千内外の聴衆も鶉衣蓬髮の連中（所謂壯士）は至て少き様に身受けたり。……本論に入り、第一内地雑居の事につき論ぜられたる要点は、条約案に反対する志賀、三宅、林、谷、井上諸氏の先祖を尋ねれば、周秦漢等の支那人が帰化したる者なり、然れども今日は純然たる日本の愛国者なり、此故に内地雑居は恐るるに足らざれども、恐るべきは居留地の拡りて彼の上海の如くに相成る事なり、左れば今日の談判の困難なるは雑居にあらざして居留地を

推潰す事に在る也と論じ、…〔二二・九・一三 東京日日〕

ここにいう所の賛否や反対は、具体的な内容を示さない限り誤解を招きかねないほどさまざまな議論を含んでいるが、つぎに一応の雰囲気を感じる程度の見出しを挙げておきたい。

「帝大総長が非条約改正演説 法科学生は条約改正研究会を組織」〔二二・九・二九 朝野〕

帝国大学総長渡辺洪基氏は、過般東海道漫遊中、静岡にて条約改正案に反対の演説をなせし由は某新聞に見えしが、同氏は又去る二十六日帝国大学学生生徒三百余名を集め、非条約改正論を演説し、併せて各自其利害得失を研究すべき希望を述べたるより、法科大学学生等は主として之に同意し、同研究会なるものを組織して、専ら其利害得失を講究中なる由なるが、教授中には講学に余念なき学生に向つて、斯る実地の大問題を提出したらんには、政治界の狂瀾に捲き込まれて、肝腎の学問を疎んずる恐れありとて痛く総長の処置に反対するものも現に之れありと云ふ。

この見出しは総長がオルグとして活動しているような印象を与えていて、記事から大学全体に賛否の議論を巻き起こした状況が偲ばれる。

「新富座に於ける改進黨の御用演説 却つて反対の火の手を煽る 条約改正問題で世論ますます囂々」〔一〇・二二 東京日日〕

「条約改正問題の措置に関する大隈の態度に伊藤伯は不満」〔伊藤枢密院議長辞表を提出〕〔二〇・一三 東京日日〕

「大隈外務大臣邸に壮士推参」〔二〇・一六 東京日日〕

という経過を経て、大きいテロ事件が勃発した。

「非条約派の烽火遂に兇変を生む 大隈外務大臣に爆弾を投擲 大隈は脚部に負傷、犯人其場に自殺す」〔一〇・一九 東京日日〕

「改正条約の実施期明記が問題 其期日までに個別談判完了の見込立たず」〔一〇・一九 東京日日〕

「条約改正問題悉く行詰り 黒田内閣総辞職決行」〔一〇・二四 東京日日〕

このような大事件は当時の知識人のみならず、日本人大衆にも政治経済に大きい関心を呼び起こしたものと考えられるから、井上円了や『日本人』の同人がこの問題を論じたのは当然のことであろう。

b 鹿鳴館の欧化主義

また、別の一面から見ると、「国粹主義」の主張の背景に、鹿鳴館に象徴される欧化主義がある。

「外国人接待所として鹿鳴館出現」〔一六・七・七 郵便報知〕

この鹿鳴館は「各省の釀金より成立したる共有物」〔九・一七 郵便報知〕の形をとった施設であるが、つぎのように、生活の窮迫していた庶民からは掛け離れた税金の無駄遣いに見えた。

「鹿鳴館 何と華やかな開館式 内外の貴顕紳士一堂に集って大浮かれ」〔一六・二・二八 東京日日〕

「舞踏を知らねば交際が出来ぬと 貴顕紳士が鹿鳴館でお稽古 所謂「鹿鳴館時代」の開幕」〔一七・一〇・

二八 時事

「鹿鳴館ならでは夜も日も明けず 連日の舞踏会」〔二九・二・二七 東京日日〕

「朝野内外の紳士一千七百名が踊りぬく 鹿鳴館に於ける天長節大夜会 一世のハイカラー井上外務卿の招

宴」〔一一・五 東京日日〕

「鹿鳴館時代去って洋服時代去り 憲法発布で又々服屋が繁昌」〔二二・二・二二 東京日日〕

「時代は移る 鹿鳴館松下」〔二七・一一・二九 時事〕

このような時代背景は、この新聞記事の日付を追ってみると分かるように、実に目まぐるしく変わっている。

このようなはやいテンポの激変に対応して生きて行き、さらに思想的に対応してゆくには、時代的な価値観の変化を敏感につかみ、なおかつそれを超えたものを、たえず模索し続けなければならない。井上円了は思想家としてまた研究者としてさまざまな文章を残しているが、同時にこの激変する価値観を超えた真理即真如を求め続けた。

ここでは、いろいろの資料と井上円了の人生や思想と直接に結び付けて論証してゆく記述はしていない。この時代の書簡や行動を裏付ける文章の有無をまだ十分に調べていないので、後日の論証を待ちたい。しかし、明治三八年に「日本学生の特徴」を書いて、これが転載され、引用されて、評判になつている。その内容は学生と言う限定がついてはいるが、「日本人論」に該当するもので、両者を比較すると問題の中心に変化が見られる。この比較をすることも、一つの方法として検討に値するものと考えられる。書簡等の資料が十分に集められなかった場合は、この研究を今回に続けたい。

【注】

(一) 日本の宗教は多神教の仏教が主となつてゐるために、マックス・ウェーバーのいう「呪術の園」Zaubergartenの域を出ないために近代化は困難という考えが大塚久雄氏の立場である。マルクス主義的な分析手法による具体的な思想問題でも、経済的な生産力と生産関係との矛盾を土台としてゐるので、教条主義的な色彩の濃いものとなつてゐる。特に井上円了の時代については、絶対主義天皇制の形成過程から完成さらに矛盾の露呈までの時代に当たり、戦後の占領軍の思想対策とも絡んで、「封建的」「超国家主義的」という言葉がそのまま一つの価値判断のレッテルとして使

われた戦後の研究のムードの中で、新たに「井上円了即天皇主義者」という人間像が創られたものと考えられる。

(2)

高木宏夫「解説」『井上円了選集』第三卷三九五頁

(3)

この号は勿論それ以前の時代の井上円了の文章には句読点のない片仮名文が多く、その読み方によって意味の受け取り方の違いが有り得るので、読み方の誤りがあった場合の修正のご指摘を期して、この引用文にはあえて句読点をつける事にした。雑誌『日本人』は月二回刊であったが、「日本宗教論」(其二)五月一八日記載の第四号から、井上円了は平仮名を用い、句切点をつけている。しかし濁点の表記はしていないので、ここだけは便宜上濁点をつけた。

(4)

『日本人』第一号(明治二十二年四月) 八頁

(5)

志賀重昂を中心とする政教社については、田中菊次郎「政教社のナショナリズムと井上円了の『護国愛理』」(高木宏夫編『井上円了の思想と行動』 東洋大学創立百周年記念論文集所収)を参照されたい。

(6)

自由民権運動との関係については、政教社の活動が自由民権運動に対抗し衰退させる目的をもっていたとする見解が戦後の主流となっていて、田中菊次郎の前掲論文もこの立場に立っている。井上円了は「其事大ならざるに非ず」とここでも断っているように、相対的な位置付けをしているにすぎず、異なった見解を裏付ける資料もあるので、稿を改めて検討をしたい。

(7)

『日本人』 第四号一三頁

(8)

同右 第七号七頁

(9)

同右 第四号一三頁

(10)

同右 第七号五頁

(11)

同右 第七号六頁

(12)

同右 第八号一五頁

(13)

同右 第一二号七頁

(14)

「護国愛理」に関する客観的かつ実証的研究は非常に少ないが、三浦節夫「井上円了の『護国愛理』の変化に関する中間報告」はこれに該当するものとして参照されたい。

(15)

高木宏夫「井上円了伝ノート 3」『フィロス東洋』4号(東洋大学刊)所収

(16) 同右 3号 二〇頁

(17) 世良民平「井上円了の人間像」、前掲『井上円了の思想と行動』所収。東洋大学において井上円了に関する総合研究を大学として組織的に行った「井上円了研究会第三部会」の機関誌『井上円了研究』1所収の同氏の同題の論文は、三つの部会の合同研究発表会において、一部の研究者から「大問題」だとされた。総合研究の初期は個別研究の蓄積期ともいわねばならないほどの時期で、この一号はコピーのない時代にノート代わりに印刷されたものであったから、前述の論文で修正された。

(18) 山口静一「フェノロサと井上円了」(本誌所収) 参照

(19) 『日本人』第八号一七頁

(20) 同右 一八頁

(21) この旅行の前後の事情は『井上円了の教育理念』(東洋大学)四一頁以下に略述しているが、井上円了は『欧米各国政教日記』に政治と宗教との関係を客観的に調査報告の形で記述している。

(22) 井上円了『漫遊記』(本誌所収)は現存する最初の旅行記である。前掲「井上円了伝ノート 3」参照。

(23) ここに引用した新聞の記事は『新聞集成 明治編年史』からのものなので、表記法は一応統一されている。雑誌『日本人』は原典から引用できたので、原文のままを原則とし、変更したものは断り書きをつけた。